

広報田村

令和2年度 第2号
発行日 令和2年10月28日
発行人 会長 有賀 仁一
編集担当 田村方部

巻頭言

感動すること、疑問を持つこと、学ぶこと……

小野町教育委員会教育課 指導主事 橋本幸夫

「万物の根源は水である。」

古代ギリシアの哲学者タレスの言葉である。後世、論理学や自然科学など多くの分野で業績を残したアリストテレスがかれを哲学者の祖と仰いだことで、今日にまで続く哲学や自然科学は、かれとともにその扉を開けたという評価が定着した。かれが抱いた「この世界は何からできているのか？」という疑問が、自然科学のテーゼとして人々を導き続け、今日でも全く色あせていないことは勿論である。

新型コロナウイルス感染症騒ぎで県外への旅行や近郊への外出もままならず、庭先の草むしりや田圃の草刈りをしていた時、ふとかれの言葉が脳裏に浮かんだ。

「万物は水より生じ、そして水へと帰る。」

なるほどなあ。むしっても、むしっても、草は次々と生えてくる。きれいにむしり取ったはずの地面にも、何日かすると緑色の草がもう芽を出している。数日もすれば、緑の絨毯になる。……この草はどこからやってくるのだろうか。草を食むあれら動物たち、われわれ人はどこからやってくるのだろうか。そんな素朴な自然への驚きや恐れが、かれの学問の背景にあったのではないかと想像する。想像は翼をつける。あの乾いた台地には、草木が一本も育っていないではないか。だが、雨あがりの大地はどうだ。その潤った大地からは一斉に生命（いのち）が芽吹く。人も水がなくては生きてはいけない。生きとし生けるものは、水より生ずる。いや、この足元の大地すら母なる海に浮いているではないか。万物は、水より生ずる。そして、万物の根源は水なのだ。……そんな思いを抱きながら、タレスも日々自然と向き合っていたのではないのか。時には、農耕に汗を流していたのかも知れない。かれが生きていた頃のギリシアは、今の岩山に覆われた大地のイメージとは違い、緑豊かな国土が広がっていたともいわれる。後のギリシア文明の盛行によって、緑がむしばまれ、消費される以前の時代の話である。

「万物は無限なるものより生ずる。」

むしっても、むしっても、草は生えてくる。それこそ、無限なるものから草は生ずる、とでも言いたくなってくる。この言葉は、タレスの弟子ともいわれるアナクシマンドロスの言葉である。実際は、「火（サントリーニ火山の溶岩）が水から生ずるはずはない」という、師タレスへの反論から、目に見えるものが目に見えるものから生ずるはずはない。それは、目に見えぬものから生ずるのだ、という結論を導きだしたともいわれる。形而上学の始まりである。『存在と時間』の著者マルティン・ハイデッガーが、晩年にかれの名前を冠した小論文を残しているので、名前ぐらひは聞いた方もいるかと思う。

子どもは2・3歳になると、「あれは何？」「これは何？」という疑問を発するようになる。やがて「どうして？ どうして？」という言葉が口癖のようになり、うんざりした経験を親の誰しもお持ちではないだろうか。一方で、こんな経験もないだろうか。ハイキングや登山で、道端の可愛い高山植物などを目にした時、思わず「この花の名前は何かだろうか？」「あの鳥の名前は？」などという疑問をつぶやいた経験を……。しかし、名前を聞いた瞬間に、そんな疑問も感動もどこかへ消え去っている。名前以外には、何も知らないのに、である。言葉・観念による意識への刷り込み、感性の矮小化である。

「深い学びは、感動や驚き（日常生活への気づき）から生ずる。」

学びは、知識や言葉からはやっこない。確かに、学びは知識や言葉によって紡がれはする。だが、深い学びは、日々の何気ない生活経験や感動、その感性のきらめきからこそやってくる。豊かな生活経験を土台としてこそ、豊かな学びは成立する。学びと生活が結びついてこそ、学びは社会活動の原動力となり、生きた力として働く。まさに実学である。ICT教育やプログラミング教育、ギガスクール構想などが大もての時代だが、こんな時代だからこそ、もう一度教育の原点を見つめ直したい。

「統合5年目 新たなスタート」

田村市立滝根小学校長 佐久間 敏晴

1 学校紹介

田村市滝根町は豊かな自然に恵まれ、東部は大滝根山、羽山、矢大臣山などの山々が連なり、南西部は高原状の山地、北部は水田地帯で阿武隈川水系と夏井川水系の分水嶺を形成しています。

本校は、平成28年に菅谷小と滝根小、広瀬小が統合して現在の位置に校舎が建てられ、今年で5年目を迎えています。それぞれの小学校のよさを引き継ぎながら、新たな伝統を形成しています。さらに、今年度より滝根幼稚園が併設となり、同一施設内で連携・協力し合いながら教育活動を進めています。

2 幼稚園・小学校併設校として

(1) 滝根小学校・滝根幼稚園の概要 (下図参照)

滝根小学校・滝根幼稚園の概要



(2) 主な実践

- ① 日常的な交流活動
- ② 共同カリキュラムの実践
- ③ 英語教育の推進
- ④ 合同行事の開催
- ⑤ 幼稚園教育への理解
- ⑥ 教職員同士の連携・協力

(3) 成果と課題

① 成果

<活動の広がり>

- 幼稚園児は広い校庭、保育室、遊戯室などで自由遊びを満喫できている。
- 日常的な交流に広がりが見られ、小学生から積極的に関わり、一緒に遊んだり先生の手伝いをしたりしている。子どもたちの意思で活動や関わりが広がっている。



<休み時間の様子>



<運動会の1コマ>

<人との繋がり>

- 行動に相乗効果が見られる。小学生は見本になろうという意識、幼稚園児は小学生の行動に見習おうという思いが見て取れる。
- 幼稚園に弟妹のいる児童ばかりでなく、いない児童も積極的に関わるようになり、小学生同士とは違った触れ合いができています。
- 小学生が幼稚園の先生の保育の様子を直接見ることができ、小学生のキャリア教育に効果が見られる。

<教員同士の連携>

- 日常的に児童・園児の様子を把握できるとともに、相互参観等により指導力の向上が期待できる。また、小学校教員の幼稚園教育に対する理解が深まってきている。
- 情報交換がしやすく、協議会・研修会なども効率的に進めることができる。また、日程調整も簡単で効率的にできる。
- 同一施設内での移動だけなので、効率よく幼稚園児と小学生の交流ができ、行事なども連携して効果的に進められる。
- ② 課題 (今後に向けて)
 - より日常的な交流に広がりができるように時程カリキュラムを工夫する必要がある。
 - さらに幼小連携の効果を高められるように教育課程を編成していく必要がある。
 - 防災計画や危機管理マニュアルの一体化を図っていく必要がある。

3 終わりに

幼稚園併設について、保護者・地域の方々は、幼稚園児が小学生の学習の邪魔になるのではないかと、小学生と衝突するなどの危険性があるのではないかなどかなり心配されていました。これらの懸念事項については、ホームページやお便り、授業参観等での情報発信により解消を図ってきました。また、荒天時や日没時の園児の送迎や遊具等の設置場所などの課題もその都度幼稚園と協議しながら解決を図ってきました。また、10月11日(日)には幼小合同運動会を実施し、実際に保護者に連携の様子を見ていただくこともできました。これらのことにより保護者や地域の方の理解も深まり、「安心しました。」との声も聞かれるようになってきています。

今後も幼稚園併設校としての強みを生かしながら、幼小連携、そして小中一貫教育を進めていきたいと思っております。

「地域に開かれた学校」を再考する 田村市立都路小学校 安瀬 一正

1 「地域に開く(かれた)」を振り返る

都路小学校は、平成23年3月の原発事故による全町避難、仮校舎での教育活動、学校再開、さらに少子化による統合を経験してきた。これまでの都路町の復興は、子どもたちの元気な学ぶ姿に後押しされてきたといっても過言ではない。

田村市は、令和3年度からコミュニティスクールと小・中一貫教育を実施していく。今後益々、地域との連携を深めていく必要がある。この「地域に開かれた特色ある学校づくり」の方針は、これまで様々な機会に示されてきた。私自身も、それに従って学校経営を進めてきたつもりである。しかし、ふと立ち止まって考えてみた。「地域に開かれていない学校」や「特色のない学校」はありえるのか。

学校運営は、地域の助けなしには、ままならない。地域が「自分たちの学校の子どもは！」と誇れるような教育活動を積み上げていくことは、教育人として当然のことである。



そう考えると、「地域に開かなくては」とか「特色をつくらなくては」といった拙速は避けたいものだ。先輩たちも、私たちも当然のこととして取り組んできたことなのであり、目の前の学校課題を克服しながら、発展的に経営を行うことがその答えなのだと考えている。

2 重要な「総合的な学習の時間」

担任に「めあては、子どもが設定するのが理想」と話すと、「…無理です…」という表情をされるが多かった。「問題解決学習」の大切さを理解しているつもりでも具体的にはイメージできていないのである。

主体的な学習は、子どもが「問い」「学ぶ目的」「学

びたいという意欲」を持っていることが前提であろう。その上で問題解決的な学習を進める資質・能力を培うことができなければならない。社会人になった子どもたちが突き当たる課題を解決するには、これが重要になるためだ。

総合的な学習は、教科書もなく、問題解決的な学習そのものである。ただ、内容が行事の準備だったり、福祉、環境、コンピュータ、地域学習…などの網羅であったりする場合、子どもにどんな資質能力を身につけさせようとしているのかを担任は見失っている。これは年間時数を考えると大変な損失ではなかろうか。

総合的な学習は、身の周りの問題を焦点化し、教科の問題解決で培った力を実践し、生きる力とする重要な学習活動である。しかも、担任にも子ども以上に「問題解決の力」が要求される。

3 地域に問題を見つけ、解決を目指す

都路小では、現在国語科、算数科、理科による共同研究、総合的な学習による学級、学校経営を柱にしている。教科と教科外、家庭での学習がリンクし、着実な成果を上げることにより、保護者、地域の皆様が学校を誇りに感じ、子どもたちのために力を尽くそうという雰囲気ができるようにと願っている。

特に総合的な学習は、創立以来一貫して「都路を元気に！」をコンセプトにしている。学年ごとのテーマは、前例踏襲ではなく、担任が子どもたちの身近な疑問や問題、夢を掘り下げ、ともに解決しようという姿勢がポイントである。実はよくみれば、地域には自然、伝統文化、産業など追究することが山積みである。

6年生は、都路のよさを紹介する短い動画を作成し、会津で観光客に向けてPR活動を行った。



「いいところだね。」

「都路に行ってみたくなったよ。」

手応えを直接感じ、地域に還元できたことを実感した子どもたちの表情は、より輝いていた。

小学校高学年の教科担任制について

田村市立常葉小学校長 新田 展弘

現在、小学校高学年の教科担任制について、中教審の「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」において議論され、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（中間まとめ）」において、以下のように報告されています。

小学校高学年からの教科担任制の導入（令和4（2022）年度を目途）

- ・ 義務教育9年間を見通した指導体制の構築，教科指導の専門性を持った教師によるきめ細かな指導の充実，教師の負担軽減等
- ・ 対象教科（例えば外国語・理科・算数）や学校規模・地理的条件に応じた効果的な指導体制の在り方の検討，小中学校の連携促進
- ・ 専門性担保方策や人材確保方策と併せ，教員定数確保に向けた検討を具体化

教科担任制の導入が令和4年度を目途にしていること、「義務教育9年間を見通した指導体制」を構築し「小中学校の連携促進」が求められていることを踏まえると、今後、より一層の小中連携を図っていく必要があると考えられます。

そこで、常葉小・中学校の小中一貫教育を基にした教科担任制の取組について紹介したいと思います。

田村市は授業を中心とした5－4制の小中一貫教育を進めています。常葉小・中学校は、昨年度からスタートしました。

昨年度は、6年生が火・水・木の1・2校時に中学校に移動して授業を受け、休み時間に小学校に戻ってくる日程でした。子どもたちの移動に時間がかかってしまうので、休み時間が十分に取れないことが課題となっていました。

今年度、6年生は月曜日から金曜日の午前中に中学校で授業を受けています。小・中学校を結ぶ連絡橋が令和2年3月に完成し、移動時間を短縮することができました。さらに、小学校と中学校の1単位時間の5分間の違いを吸収できる日課表を作成したことにより、授業や行事の乗り入れがスムーズにできるようになりました。

コロナ禍のため、当初予定していた小中合同行事は見送りが続いています。年6回の活動を教育課程に位置づけ、小学校1年生から中学校3年

生までの児童生徒が交流できる機会を設けました。

小中一貫教育の中心となるのが、小学校からのゆるやかな教科担任制を導入することです。今年度は、中学校の教科担当及び小学校の専科担当が、5年生の社会、理科、音楽、体育、6年生の算数、社会、理科、外国語、音楽、体育を担任しています。また、県教育委員会のキラリ校の指定を受け、小学校担任による教科担任制として、6年2組の担任が6年1・2組の算数・図工を担当し、6年1組の担任が6年1・2組の家庭科を担当しています。

	5年	6年1組	6年2組
社会	小専科A	小専科A	小専科A
理科	教務主任	中理科担当A	中理科担当A
外国語 (T.T.)	5年担任 ALT	中英語担当A ALT	中英語担当A ALT
音楽	中音楽担当	中音楽担当	中音楽担当
体育 (T.T.)	5年担任 小専科A	6年1組担任 週1回(中体育担当)	6年2組担任

	6年1組	6年2組
算数 (T.T.)	T1：6年2組担任 T2：中数学担当A	T1：6年2組担任 T2：中数学担当B
図工	6年2組担任	6年2組担任
家庭	6年1組担任	6年1組担任

このような取組により、子どもたちは、中学校の専門の教員から学ぶことを楽しいと感じています。

昨年度、小・中学校の教員から現職教育を小中合同で実施したいとの発案が有り、今年度から、小中合同で実施しています。小・中学校の教職員は、指導法や評価について、共通理解を図り、授業を公開し互見授業に取り組んでいます。児童生徒理解が深まり、主体的・対話的で深い学びの実現を視点とした授業改善が進んでいます。



中学校教員にインタビューする
外国語の授業（5年生）

令和4年度を目途としている小学校高学年の教科担任制の導入に向けて、今後も更なる連携を図ってまいります。

「遠藤喜美治先生からのエール」

田村市立要田小学校 平塚 裕二

新型コロナ感染拡大防止のため、2020年の東京オリンピックが延期になり楽しみが減ったが、2020年前期の朝ドラ「エール」はなんとか9月から放送が再開となり、福島県民としてもホッとしている。

さて、その「エール」の中で、古山裕一（窪田正孝）のモデル・古関裕而の小学校時代の恩師となる藤堂清晴（森山直太朗）のモデルになっている遠藤喜美治先生が、実は本校の大恩人であることがこの度判明した。

きっかけはもちろん朝ドラ「エール」が発端である。老舗菓子店「三春昭進堂」で毎月発行しているチラシ「塵壺」の7月号にて遠藤先生のご紹介されていた。それを、三春町在住の職員が学校に持ってきて紹介してくれた。

そのチラシは、それまで、遠藤先生についての知識は「校歌の作詞者」程度に過ぎなかった校長の（放送が中止となり、少し意気消沈気味であった…）「エール」熱を俄然彷彿とさせてくれたのだ。

早速、沿革誌や卒業台帳を遡ってみた（しかし、明治時代の沿革誌もしっかり残っているのがすごい…）

遠藤喜美治先生は要田の荒和田地区にある農家の次男坊として誕生。明治36年に要田尋常高等小学校を卒業し、そのまま要田小の用務員（小間使い）をしながらお金を貯め、明治42年に中卒検定に合格し、要田小の代用教員となった。そして翌年に福島師範学校に入学する。



晴れて正教員となった遠藤先生は、師範附属学校に勤務し、そこで古関裕而先生の3年生から6年生までの担任となり、その間に彼の才能を見い

出したのだと思う。

遠藤先生は、自ら作曲をするだけでなく、子ども達自身に童謡を作詞、作曲させていたそうで、その曲を古関先生が友達の分まで全部作っていたと、自身の著書で記している。頼まれれば人の分でも仕上げる。できるとうれしい。その喜びが古関先生に作曲の楽しさを初めて伝えたのである。

そんな2人の合作が要田小学校の校歌である。



8月にNHKはまなかあいつTODAYで、「古関裕而からのエール」という番組で本校が校歌と共に紹介された。

その取材の中で、「校歌に対する想い」をインタビューされた。昭和16年に旧校歌作成を依頼された時、遠藤先生は東京の女学校の教師であり、東京在住であった。その旧校歌の中に、「抱く望み、学びの道に勤しむ、誉れ示さん」等の歌詞がある。苦勞して勉學に励み、立身出世を果した先輩が後輩へ送るエールが込められた歌詞に思えてならない。（要田小の象徴とも言える二宮尊徳像も、この年に遠藤先生から寄贈された。）そして、昭和40年の創立90周年記念で、校歌の改作を依頼された遠藤先生は、要田の美しい田園風景と古里の優しさを思い描きながら新たな「校歌のエール」を後輩に贈ってくれたのであろう。そして遠藤先生の想いは確実に受け継がれていると私には思える。



「NHK古関メロディーで福島をつなぐ」より
https://www.nhk.or.jp/fukushima/hamanaka/koseki-toukou/video_20200820-h.html

令和2年に思う

三春町立御木沢小学校長 佐々木 初江

気、淑く迎えた令和初めての今年のお正月でしたが、瞬く間に世情は一変し、令和2年はコロナ禍一色の有事の年となりました。誰もが経験したことのない未曾有の事態に、心配し、悩み、決断を迫られることの多い日々となりました。

平時の学校経営に加え、子どもと教職員の安全と安心や子どもの学びの保障をどうやって担保していくのか、心的ストレスの軽減や業務改善をどのように図るか、各種教育活動を充実させつつ見直しを図られる箇所はないかなど、いろいろと考えることが多くなりました。

考えるときの拠所となるのは、文科省や厚生労働省、県教委・町教委等からの文書、webでも見られる実践例であり、本校や地区の実態に合わせて考えながら考えています。また、田村地区の校長先生方との語らいの中から得るものがとても多く、いつもありがたいと思いながら拝聴しております。先輩であり私の目標でもある校長先生諸氏の豊かな経験や深い見識と洞察力に裏打ちされた考えに触れることは、校長経験がまだ浅い私にとって、考え判断していく上での大きなよすがであり、今後の人生における貴重な財産にもなっております。

令和2年の怒濤の日々も10ヶ月が過ぎ、今、脳裏に浮かんでいるのは、「不調を肯い、好調を疑う」という言葉です。昨年度は、協働的に教育活動に取り組む本校の教職員や屈託無く一生懸命に取り組む子どもたち、理解があり協力を惜しまない保護者や地域の方々のお陰で、私は“好調”なスタートをきれたような気持ちになっていました。ところが、コロナ禍で状況は急変しました。いえ、表向きは急変したように見えますが、実は、昨年は坂道を転がり落ちている状況で、私自身がそのことに気づかなかっただけなのかもしれません。今年は労多く、なかなか意をスムーズに実行することができないしておりますが、これは、今の自分にとって必要な負荷がかかっている状況であり、自分の成長に不可欠なのだとの思いをかみしめながら、一日一日を過ごしています。

さて、縷々反省ばかり述べてきましたが、反省一辺倒では心もすさんでまいりますので、前向きな思いも述べたいと思います。

本校の教育目標は、「夢や希望をもって、未来をひらく児童の育成」であり、この下位目標に「よく考える子ども」「思いやりのある子ども」「たくましい子ども」の3つがあります。「たくましい子ども」における実践目標のひとつに「体力の育成」があり、授業以外においても体力づくりが盛んで、業間マラソン、冬季はなわとびに熱心に取り組んでいます。

昨年度から、県教委主催のwebなわとびコン



テストにも挑戦し、現3学年が入賞、賞状をいただきました。本校は全て単級学級ですので競い合う相手がいないのが残念ですが、なわコンでは、自分たちの記録の向上に挑戦するとともに同程度の規模の他校の学級や友達と競い合うことができるため、目標を持ちやすくモチベーションも上がりました。年間を通したマラソンやなわとびの取組を通して、本校の実践目標のひとつである「のりこえる力（レジリエンス）」の涵養を図っています。

また、本校では、体のたくましさだけでなく心のたくましさも大切にしています。学習・運動・健康管理・生活上のことなどにおいて、物事を続けることの大切さと尊さ、その有用性を実感させ、自己マネジメント力を育成していくよう取り組んでいます。

9月からは、校内授業研究会も始まりました。子どもの学びの質の向上に向けて、本校の教職員も歩みを止めません。



できないことを憂えず、できることの模索と発見・工夫・改善で、私も一つひとつのりこえていきたいと思っています。

子どもたちのためにできることを・・・！
三春町立沢石小学校長 伊藤 栄

今年度は、新型コロナウイルス感染症への対策で、各学校とも学習活動や学校行事等、変更や中止を余儀なくされ、大変苦慮されていることと思います。

9月、10月には小学校では、延期していた運動会を学校の規模や地域性を考慮しながら、実施しているところでしょうか。

本校では、9月26日に予定しておりましたが、雨の影響で翌27日に実施しました。本校の校庭は水はけが悪く、体育館での実施も視野に入れていたので、外でできるか心配でしたがPTA会長さんの一言で、手伝えるお父さん方が何と6時に集まってグラウンド整備をしてくださいました。この協力体制が沢石小の保護者の皆様のすばらしいところであると、改めて実感いたしました。



例年ですと、消防団や老人会、同窓会の方々もお呼びして開催するところですが、今年度は保護者と児童、教職員のみで行いました。そのような中、PTA会長さんのアイデアでPTAによる綱引きを急遽行うこととなり、こじんまりとした運動会を盛り上げてくださいました。



子どもたちも大喜びで、「外で出来て良かった」という感想や6年生の応援団長からは「負けたけれど、絆を深められて一番楽しい運動会だった」という言葉が聞けて、心温まる運動会を実施することができました。

また、学習活動も「学びの保障」と言われる中、何とか充実した学びができないか取り組んでいるところです。

本校の子どもたちは仲が良く、分からないところを聞いたり、支え合ったりする関係ができていると思っています。これも沢石地区の地域性であり、今まで関わってくださった先生方のご指導のお陰と感じ入っています。



臨時休業からの学校再開当初は、机の間隔を広く取り、ペア学習や対面式の学習を避けていましたが、学習内容によっては、マスク着用で学び合いの学習を取り入れるようになってきました。少しでも「主体的・対話的で深い学び」が実現されるように、教員一人一人が工夫して授業実践に励んでいます。現職研修が思うように進んでいませんが、今年度は一人一人が自分の研究テーマを設定し、取り組んでいます。

少人数であるが故に子どもたちが見え、教師が待てずに教えてしまったり、少人数であっても学習に参加できていない児童（学びが成立していない児童）が見られたり、そのような課題を教員全員で共有しながら授業改善につなげていきたいと思っています。



今後、三春町ではGIGAスクール構想による整備が進み、一人1台の端末や各教室に電子黒板が導入される予定です。このようなICTの活用についても単なる調べ学習などに留まるのではなく、どのように探究活動につなげられるか考えていかなければならないと考えています。これからも充実した学びを目指していきたいと思っています。

